

第22回ペスタロッシー教育賞受賞者に、奥地圭子（おくちけいこ）氏が選ばれましたので発表いたします。

【第22回ペスタロッシー教育賞 受賞者】  
特定非営利活動法人 東京シューレ 理事長  
奥地 圭子（おくち けいこ）

【略歴】

1941年生まれ。東京大空襲後、父の郷里広島県で育つ。1963年より東京・広島で公立学校教員。70年代末、我が子の登校拒否を体験。1984年「登校拒否を考える会」代表。1985年教職を辞し、子どもの居場所・学び場「東京シューレ」開設、理事長。2007年不登校の子ども対象の私立中学「東京シューレ葛飾中学校」開校、校長。フリースクールや親の会の全国的なネットワーク、不登校新聞社などのNPO活動にも長くかかわっている。

【受賞理由】

奥地氏は22年の教職を辞し、不登校の子どもに学習の場を保障するため雑居ビルの一角を借りて「東京シューレ」を開設した。1985年のことである。当時はまだ不登校が登校拒否と呼ばれ、治療・矯正の対象として偏見のまなざしをもって見られていた。以後、氏はこの偏見と闘う最前線に立ち続ける。不登校児が安心して過ごせる居場所を確保し、当事者同士のネットワークをつくり上げた。不登校新聞の発刊をはじめ、書籍の出版や講演活動を通して、社会のなかにある不登校への無理解を明確な言葉にして一つひとつ解きほぐしてきた。氏のそうした活動に救われた若者と親の数は知れない。不登校への偏見はいまだ社会に根深いが、氏の年来の努力によりひとびとの考え方は着実に変わりつつある。

長らく小学校教員をしていた奥地氏をはじめから不登校を正しく理解できていた訳ではない。我が子が不登校となり、子ども自身や育児にその原因があるとする言説に違和感を抱くことから始まる。我が子に向けた愛が不十分であったと責められることには納得できなかった。精神科医師の渡辺位により、いじめや行き過ぎた管理に対する自己防衛反応として不登校があることを知り、不登校問題が社会の側の問題であることに気づく。親の会を立ち上げ、不登校児もそれぞれが認められ受け入れられる居場所を求めていることを痛感した氏は、自らの教職経験を活かして、不登校児の学習の場を開設するのである。

その奥地氏の22年の教職もまた、偏見と闘い、優れた教育実践を追求し続けた期間であった。結婚、三児の出産・育児、親の介護。その都度、「はずれ」の担任と保護者から失望の言葉を向けられた氏は、実践において、また子ども理解において、決して引けを取らないことを示してきた。女性として、母親として体感してきたことを教師の仕事に十分に活かすことができるとの自信もあった。授業を磨くためにさまざまな研究会に出かけ、遠山啓に導かれて優れた実践を開発した。終の棲家と決心して移動しながら家庭の事情で東京に戻ることとなった広島市での実践記録は、こども新聞活動や創作平和劇指導とともに書籍として出版・紹介されている。学年初めに失望の言葉を向けた保護者らも年度半ばには氏の教育実践をよく理解する支援者となってくれた。

奥地氏の不登校児へのまなざしは暖かい。偏見に対する氏の果敢なる挑戦は、守るべきものへの優しさから発し、年来の教育実践に裏付けられた強さをともなっている。氏の長年の努力と功績に対し、第22回ペスタロッシー教育賞を贈呈し、高く顕彰したい。